

編集後記

▼「現代宗教研究」第十七号をお届けします。今回は、日蓮宗の教化学研究を特集しました。住職教師の使命は、上求菩提・下化衆生といわれます。それは、仏の教えに従って自身の向上をはかると共に、悩める衆生を仏の教えの道に入らしめることですが、仏の境地を求めることはさることながら、現実には、多くの教師はむしろ後の衆生を教化するところにいると苦悩しているのではないのでしょうか。法華経には「常に法を説いて、無数億の衆生を教化して、仏道に入らしむ」とあります。常に法を説き、教化を施しているところに仏の久遠性があり、これに沿って衆生を仏の道に入らしめることに菩薩の使命があると思います。従って菩薩教師の一番問題となることは、衆生を仏道に入らしめるための「教化」であります。そしてその教化の方途であろうと思います。立正安国を実現せしめる教化が、日蓮宗に問われている、遠忌後の果題でありましょう。その教化研究の意義や在り方について、長谷川正徳・石川教張両師の論考が明確にしました。寄稿の三原正資師の論考も、『立正安国論』にみられる教化の視点を問うたものです。いまだ体系されていないものを研究し体系

化をめざすことも学問ではないかと思えます。

▼久住謙是師は、東京の多摩地区を取りあげ、寺院の移動の軌跡を追求して教化の変動と今後の寺院動向の見通しを、立地論より明かしました。また宮川了篤師の論考は、近代日蓮宗教化の先駆者優陀那院日輝の修法教化と靈鷲院日審の言説布教の活動の姿を追究したものです。

▼昨年、現宗研は第一回教化化学研究集会を開いて、四名の教師に日常教化活動の一端を発表してもらいました。各師共三十分ほどの発表でしたが、本誌に掲載した要旨は、記録テープからまとめたものです。今後、回を重ねて教化研究の交流を深め、いろいろと研究発表していく中から、教化の方法・在り方が提示されていくことと思います。第十五回中央教研での特別報告も教化の体験を発表されたものです。

▼本誌は、研究所の生命であると共に、教化研究を思索し発表する場でもあります。教化集団であるべき日蓮一門を構成していくため、全寺院配布をめざし、大方のご活用とご支援そして諸兄のご批判をお願い致します。

(高橋謙祐)